# 小説伝

# 純愛伝

kyoji kobayashi

小林恭二

# 小説伝
# 純愛伝

kyoji kobayashi
小林恭二

福武書店

**小林恭二**（こばやし・きょうじ）
一九五七年、兵庫県西宮市に生まれる。東京大学文学部美学芸術学専修課程修了。八四年、「電話男」で第三回「海燕」新人文学賞受賞。大学在学中は「東大学生俳句会」の一員として活躍し、現在も俳句の形式美をとり入れた小説作品に取り組んでいる。著書として「電話男」がある。


小説伝・純愛伝

一九八六年三月一〇日　第一刷印刷
一九八六年三月一五日　第一刷発行
定価　一三〇〇円

著者　小林恭二
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二-三-二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇-二一三一
振替口座（東京）六-一〇五〇九七

本文印刷　平版印刷　大日本印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）


© K. Kobayashi 1986

ISBN4-8288-2185-6 C0093
NDC 913 194 244p

# 目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小説伝 …… 7
純愛伝 …… 113

裝丁　菊地信義

# 小説伝・純愛伝

# 小説伝

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

## 1

西暦二〇六四年五月二十八日。東京北区の公団アパートで一人の男が死んでいるのが発見された。

野々村佑介。本籍・日本国東京都渋谷区桜ヶ丘。一九五五年十二月二日生れ。享年一〇八歳。死因は栄養失調から来る全身衰弱。

長期滞納の管理費を取りたてに来たアパート管理人が、いつ来ても氏が留守なのに不審を感じ、合い鍵を使って氏の部屋に入った時には、氏の肉体は、既に死後十七週間を経過した腐乱肉塊となりはてていた。

野々村氏には家族がいなかった。近親者も既に死滅していた。このため、遠縁の青果小売業を営む若者（高田三郎、当時二十二歳）が、当局によって召喚された。若者は遺産相続人

として認定されたことを告げられ、野々村氏の葬儀の執行を委任された。

野々村氏の葬儀は、発見から六日後の六月三日、公団アパートの第三集会所でしめやかにおこなわれた。喪主は高田三郎。葬儀の参列者は死体発見者であるアパート管理人・時岡信也、野々村氏と同フロアー（三十七階）の自治会班長・藤田星江、同副班長・鬼面孝夫の三人である。

葬儀は、おりから季節はずれの冷たい雨がしのつく中、午後二時七分に始まった。まず区役所から派遣された浄土真宗大谷派の僧侶田中義円によって短い読経があげられた。ついで参列者たちが極めてあっさりと焼香をした。最後に喪主の若者がしどろもどろの挨拶をした。

葬儀はつごう十一分間でつつがなく終了した。

死亡した野々村氏には結婚歴はなかった。友人もいなかった。近所付き合いもなかった。公団アパートの住人で氏の姿を覚えている人は稀だった。殆どの住人が氏の存在すら知らなかった。後年、野々村研究が盛んになり、世界中から多くの研究家がこの公団アパートを訪れることになるが、氏と親しい関係にあった人はついぞ発見されることがなかった。

野々村氏は高校卒業後、板橋の倉庫会社、竹山倉庫ＫＫに就職した。三十七年間同社に勤務し五十五歳で退職した。最終職階は輸入管理二課主事補。業務上での賞罰記録は共に無い。

野々村氏は極めて無口な人間だった。顔見知りと会っても殆ど口をきくことがなかった。このため氏の隣人の多くは氏のことを聾唖者だと考えていた。

野々村氏は外出することも滅多になかった。あるとすれば良く晴れた日の昼下がり、近くの商品管理センターに食糧品や日用雑貨品を受けとりにゆくくらいだった。

野々村氏は百歳を越える高齢であったにも関わらず、死亡直前まで極めて健康だった。地元の病院のカルテを見ても八十九歳の時に軽い風邪にかかって一週間ほど通院したことがあるきりである。区の健康診断結果もほぼ申し分ない。近所の人も、野々村氏は腰もまがっておらず、肌の色つやも良好で、どう見ても六十代前半にしか見えなかったと証言している。

後にここから野々村自殺説が唱えられることになる。当時の検死報告を見ても、死因としてあげられているものは栄養失調だけで、体内器官の具体的損傷は認められていない。斯界の権威カスパール・Ｂ・ロートリンゲン博士もこの事実に着目して、その大著「ユースケ・ノノムラの絶望と希望」の中で氏の死因を計画的飢餓死即ち自殺であると断定している。

野々村氏の葬儀の翌日、喪主をつとめた青果小売業の若者が遺品を整理するために氏の部屋を訪れた。部屋の中をひととおり見わたした若者は故人の生活のつつましさに驚かされた。食器は皿、碗、湯呑みなどすべて一個ずつ。調理器具は鍋とフライパンとナイフと電気ガマがあるだけ。洋服ダンスの中には、よれよれのズボン二本と綿の抜けたジャンパー一着、それに濃紺の地味なスーツが一揃え。あとの衣類はひとまとめにして三つある引き出しのうちの一つに納められていたがそれでもスペースがあまるくらい。家財と言えば、テレビ、キッチンテーブル、廃品の再利用品らしい不揃いの椅子二脚、前世紀末のものと思われる汎用コンピューター、旧式の電気器具いくつか。本当にこれだけでちゃんと生活ができたのだろうか。カラハリ砂漠の遊牧民だって今時もうちょっといい生活してるよ、と若者は思った。

ただ、ちょっと異様だったのは、何かの資料らしいスクラップ集やコピー類の圧倒的な多さだった。それらはみなダンボールに詰められて、広からぬ居住空間の大半を占めていた。しかし若者はさして気にもとめず、老人特有の収集癖に違いないとあっさり片づけた。

それから若者はひと通り家財の吟味をした。食器はみんなカビが生えている。電気製品はみんなガタがきている。家具はみんな腐りかけている。後はやくたいもないダンボールばかり。若者はこの部屋にすべからく価値あるものなし、と判断した。若者は廃品回収業者にト

ラックをまわしてくれるよう電話をかけた。それから、家財の一切と大量のダンボールを、エレヴェーターで一階のホールまで数回に分けて運んだ。公団アパートが老朽化しており、部屋（ユニット）ごと運ぶと危険だと管理人に言われたからである。若者は汗水たらしながら、これで銀行に預金がなけりゃ一日分の労賃もでやしないと思った。

何回目かに部屋に戻った時のこと、若者はふと、ダンボールとダンボールの間に、うすっぺらな油紙の包みがおっこちているのを発見した。何だろうと拾いあげてみると、ずっしり重い。油紙を広げてみると中から一枚のアルミフロッピーディスクが出てきた。それは大容量の企業用フロッピーで、身よりのない老人の生活にはあまりふさわしいものではなかった。若者はこれはめっけものだと思ってポケットに入れた。内容を消去して売りとばせば今日一日の日当くらいはでると思ったのである。

野々村氏の遺品の整理を終えた若者は、家に帰り風呂に入った。風呂からあがるとビールを飲み、自動調理器から料理をとりだして、食べた。料理はうまくもまずくもなかった。若者はゲップをした。一人暮らしはわびしいから早く結婚したいとも思った。それから、野々村氏の家で拾ったフロッピーのことを思い出し、読み取り機にかけた。内容を見るためではない。内容を消去するために。しかし、若者は間違えてインデックス・キーを押してしまった。若者は舌打ちをした。

カタン、

カタン、
カタタ、
コンピューターが呼び出したインデックスを見て若者は驚いた。フロッピーの容量ぎりぎりまで情報が打ちこまれていたのだ。（これは大企業の三年分の経理帳簿に相当する。）インデックスは五万項目に分けられていた。一つ一つには認識番号がつけられているだけで何のコメントもついていなかった。内容は想像できない。若者は内容をのぞいてみたくなった。彼は認識番号の1を呼び出してみた。若者はビールをぐびりと飲んだ。
カタン、
カタタ、
コンピューターのディスプレイに現れたのは、小説だった。前世紀末から殆ど書かれなくなったあの小説であった。
しかも、それはただの小説ではなかった。それは見たことも聞いたこともないような長い長い小説だった。

## 2

それがどのくらい長いかと言うと、件のフロッピーのタイプでは最大でA4紙二十万枚分の文字原稿が入ることになっているのだが、容量の残部が殆どないことから、ほぼそれだけ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com